
報 告

[立教大学経済学部 歴史部会ワークショップ]

博物館所蔵日本貨幣の研究

—— 在欧博物館の調査事例を中心に ——

櫻 木 晋 一[†]

日 時：2024年2月16日（金）16：00～18：00

会 場：池袋キャンパス 12号館4階共同研究室

報告者：櫻木 晋一（朝日大学／下関市立大学名誉教授）

参加者：菅沼 隆（立教大学経済学部教授）、林 采成（立教大学経済学部教授）、
西崎 純代（立教大学経済学部准教授）、岡部 桂史（立教大学経済学部教
授）、島西 智輝（立教大学経済学部教授）、田中 醇（立教大学経済学部
助教）、安士 昌一郎（立教大学経済学部助教）、千枝 大志（中京大学／
三重短期大学講師）、棚井 仁（和光大学経済経営学部講師）

司 会：菊池 雄太（立教大学経済学部教授）

菊池 第4回立教大学経済学部歴史部会ワークショップを始めたいと思います。今回は、下関市立大学名誉教授、朝日大学教授の櫻木晋一先生をお招きしています。これは連続公演として実施しており、3回目となる今回が最終回となります*。

櫻木先生は貨幣考古学の専門家、第一人者で、これまで本ワークショップで当該学問分野についてレクチャーしていただきました。今回は特に考古学的な実地調査、フィールドワークについて具体的に教えていただきました。

2023年12月に櫻木先生はイギリスの Royal Numismatic Society（王立古貨幣学協会）からメダルを授与されました。海外に散逸している日本貨幣を整理し、目録を作成してデータベース化した業績が特に評価されての受賞ということでした。大変栄誉ある、素晴らしいことだと思います。立教大学経済学部歴史部会ワークショップは、イギリスの王立古貨幣学協会に先駆け

[†] 朝日大学経営学部教授・下関市立大学名誉教授

* 第1回目の記録は『立教経済学研究』第74巻4号、2021年3月、pp.81-114に、第2回目の記録は第77巻3号、2024年3月、pp.81-106に掲載

てワークショップを実施し、櫻木先生の業績を整理していただいくという取り組みを実施してきました。本日のワークショップでは、まさに先般表彰された海外での調査についてお話していただくことになっています。それではよろしくお願いします。

櫻木 櫻木です。いよいよ3回目となり、これで最後なので、私も今日が終わるとほっとできます。また、今日は研究仲間の千枝大志さんをお招きしています。彼は山田羽書の研究では日本の第一人者であり、岩波講座『日本歴史』にも論文を書いていますし、多くの業績がある人物です。最近、紙幣をモノ資料として取り扱い、紙の材質などを明らかにすることや、券面に書かれているデザインなどを研究しており、いわゆる貨幣考古学の分野に紙幣も入ってくるような研究にとりかかっています。私からお願いして来てもらっていますので、私の話に若干プラスしてもらおうかと思うところです。

それでは早速、始めたいと思います。第1回目はZoomで総論をやりました。第2回目は、これまで私が考古資料をどう取り扱ってきたかを話し、今日は博物館所蔵資料をどのように調査してきたかという内容なので、3回シリーズとして完結するのかなと思っています。菊池先生からのリクエストでもあり、このような構成にしましたが、私は立教大学に非常に感謝しています。なぜかという、Royal Numismatic Societyが私を評価してくれた1番目の理由は、この30数年にわたってコイン・ファインド、つまり考古学的な資料をデータ化している日本では珍しい研究者であることです。ヨーロッパでは当たり前のことなのですが、それに対する評価だったのです。

そして2番目は、菊池先生から言っていたように、2001年のケンブリッジ大学留学以来ずっと海外に散逸している日本貨幣のデータベースを作って公表してきました。去年の夏にはデンマークの資料をまとめ、立教大学にもこのカタログがあるのでご覧いただけたと思いますが、日本学士院から発行することができました。これが直近の仕事としては大きかったのかもしませんが、Royal Numismatic Societyのメダル受賞が決定した時には、このカタログはまだ出版されていませんでした。2022年夏は千枝さんも一緒でしたが、ワルシャワ大学での学会報告でこの内容について話したのを、おそらく学会の主要なメンバーの誰かが聞いていたのだと思います。これは第1回のメダル授与が1883年なので、141年目で私が日本人あるいは極東の人間として初めてもらえたということは、非常に名誉なことだと思います。これがそのメダルですが、けっこう重いです。側面に私の名前が入っていて、銀925とありますからほぼ純銀製のメダルです。(写真1)

日本学士院の仕事としてこのカタログを出版したものですから、まず外務省にこの受賞の話がいつ、次に外務省から英国大使館に話がいき、「大使が会われるから来てくれ」ということになり、表敬訪問してきました。表彰式の翌12日に林肇駐英大使にお会いして、13日にはデンマーク国立博物館が出版祝賀会をやってくれ、そこには宇山秀樹駐デンマーク大使も参加されており、2時間ほどのパーティを開いていただきました。



写真1 Royal Numismatic Society メダル

11日の授賞式では記念講演を45分間、英語で冷や汗をかきながら話しました。私は日本史が専門の人間で、英語は得意ではないので原稿を読む形にさせてほしいと前もって断り、8枚の原稿を読む形にしました。最初に言った立教大学に対して感謝していると言う意味は、私がこの3回シリーズ、特に1回目、2回目にお話しした内容を、ぐっと圧縮して45分間の英語スピーチに作り替えて報告ができたことです。つまり、菊池先生が私に対して課したタスクがそこで役立ったのです。

この時は渡英してすぐにケンブリッジに行ったのですが、ケンブリッジ駅がずいぶん変わっていて、自動検札機があったのにはびっくりしました。また、駅併設のスーパーではキャッシュが使えなかったのにも驚きました。私はお金の研究をしていますし、現金払いのほうが楽なのですが、イギリスもずいぶん様変わりしてきました。

今日の話は、最初はケンブリッジ大学、オクスフォード大学、そしてブリティッシュ・ミュージアムでの調査について説明して、後半部分はデンマークの資料を中心に話そうと考えています。

これはフィッツウィリアム博物館の正面玄関です。2001年～2002年に私はここに勤めていました。ここには5つの研究セクションがあり、その中の1つがコインズ&メダルズで、貨幣研究は1つのセクションとして存在しています。そのトップはキーパー (keeper) で、日本語に訳すと「部長」でしょうか。私がいた時には同じ年のマーク・ブラックバーン (Mark Blackburn) がキーパーで、彼は2011年にがんて亡くなりましたが、私にとっては大恩人です。イギリスの中でもオックス・ブリッジは名門大学なので、この博物館に1年いたことは私の研究にとってすごい飛躍につながりました。最初にこの博物館を訪ねた時には、この玄関の荘厳さに圧倒されました。行かれた方はいますか。どうでしたか。

西崎 イギリスで好きな博物館の1つです。

櫻木 コインの展示室もあります。実はこの展示室以外にも広いスペースの研究室が2つあります。古い建物ですが、うまく工夫しながら研究室に仕立てていて、狭い通路で繋がれていて、集密書庫もあります。収納されているボックスには、抜き刷りなどがたくさん入っており、抜

き刷りも内容別にナンバーが付されきちんと整理されています。貨幣に関する論文や著書については、ここに行けばほとんど何でもあるという状態になっています。

私は2001年4月～2002年3月までの丸1年間ここにいて、その後も毎年ここを訪ねています。コロナ禍の2年半だけは行けませんでした。一昨年、昨年と行ってきました。予約なしでも行ける良好な関係が、この20数年で構築されています。私がした仕事は、ここが持っている日本貨幣、中国貨幣、ベトナム貨幣、朝鮮貨幣のデータベースづくりです。中国貨幣に関する最後の仕事として清朝銭のデータベースをつくりかけているので、今年も行つてその続きをやりうと思っています。日本貨幣については2001年に論文化していますが、この20数年で新しい資料の購入や寄贈を受けたことでずいぶん質もよくなっています。今はそれらも加えて改訂版をつくりなおしているの、あと数年は通わせてもらうつもりです。向こうの学芸員にしてみれば、自分にはよくわからないことをよそから来て仕事をやってくれるということで、御の字だろうと思います。

これは一番メインの研究室で、たまにはパーティをやったりします。(写真2) この一番左はフィリップ・グリアソン (Philip Grierson) で、Oxford University Press から『Numismatics』という本を出しているこの世界の第一人者です。私が留学していた時には高齢で、2006年に亡くなりました。彼は Gonville and Caius College という名門カレッジの学長もされました。その隣はドイツ人のマイケル・マツケ、その横が現在の Royal Numismatic Society の会長であるマーティン・アレン。その隣のテッドはアメリカ人で、スペイン貨幣の専門家です。一人置



写真2 研究室の仲間たち (フィッツウィリアム博物館)

いてマーク・ブラックバーンがいて、その右はアメリカ人でローマ貨幣を専門にしているビル。その横の女性はフィンランド人のエリナ・スクリーンで、今はオクスフォード大学で教えています。その右はベルギー人のサージ・ボッファで、まさに多国籍軍といったところです。

この博物館にはエリザベス女王が来られたこともあり、これは2005年にマークが女王に説明している写真です。また、これは日本の中世経済史を専門とする川戸貴史さんと高木久史さんが見学にやってきたときのものです。私は印象派の絵が大好きなので、博物館内の一室に印象派の部屋があって、昼休みには本物の印象派の絵を見ることができ、至福の時を過ごすことができました。

写真3はコイン・キャビネットで、開けたところです。西洋では基本的にはこういうものに貨幣は収納されていて、添えられたチケットと呼ばれる小さな紙にすべての情報が書き込まれています。

ここ20年くらいはオンラインで情報を公開すべしという流れがあるので、全点とはいきませんが収蔵品の写真を撮り情報をアップしています。これはもう古い画像ですが、当時はこのような形でデータを見ることができるようになっていて、私は留学中にこの作業をしていました。ここにあるデータをもう少し注意深く見ると、一番上は江戸時代の寛永通宝鉄銭です。その下の3つは長崎貿易銭ですが、中国のお金ではなく日本の元豊通宝で、長崎から東南アジアに輸出していたお金です。また、一番上の鉄銭の鋳造所は石巻です。向こうの人は、どこでつくられていたかということを非常に気にするのです。日本の場合には鋳造場所がよくわからず、ブランクのものが多いです。

これは私がつくったものではないので詳しい説明はできないのですが、マーク・ブラックバ



写真3 アンティークなコイン・キャビネット（フィッツウィリアム博物館）

ーンが作った世界の優良な貨幣博物館が網羅されたスライドです。私が申請した日本学術振興会の短期招聘事業に採択され、彼が日本銀行や、早稲田や中央などいくつかの大学で話をする時に作ったものです。例えば、アメリカも入っていますが、ヨーロッパではどこのコインコレクションが優れているか、五大コレクションを挙げています。

大英博物館所蔵の日本貨幣カタログは私が作りました。パリ国立図書館の貨幣については今年からカタログ作りに入ります。基本的なパリのデータはすでに10年くらい前に作っています。それからベルリンのミンツ・キャビネット。この調査は菊池先生にお願いしたい。私一人では無理なので、調査のきっかけをつくっていただければ仕事はできるだろうと思います。それからアメリカのアメリカン・ヌミスマティック・ソサエティ。ここには千枝さんが2回行って調査をしていますので、後で補足してください。

エルミタージュ美術館の調査はこの戦争状態では難しいと思っていますが、良い資料を持っていることは間違いありません。それ以外にも、オクスフォード、フィッツウィリアム、コペンハーゲンの3箇所は私がすでに調査をしたので、これまでにかなりのものについては調査をやっていることになります。しかし、ミュンヘンにもあるし、ウィーンにも資料はあります。ウィーンのはシーボルトが持ち帰ったものだったと記憶していますが、かなり昔に行ったので、その時はまだ自分でデータベースを作るという大それたことは考えていなくて、ただ見せてもらっただけです。改めて行くとすれば、全点のデータベースを作りたいと申し出なければいけません。その他の都市にもコレクションがありますので、もし詳しく知りたい方がいれば、これをプリントアウトして調べれば良いので、ご利用ください。

どこの博物館のものが良い悪いとステータスを書いてあり、これはスタッフの数です。覚えておいていただきたいのは、現在は古貨幣学（numismatics）という分野はヨーロッパでもマイナーになりつつあるということです。例えばブリティッシュ・ミュージアムにはスタッフが12人いると書いてありますが、去年行ってみたら5人になっていました。あるいは、ケンブリッジは6人と書いてありますが、今は2人です。コペンハーゲンも3人になっていて、今回のカタログ用写真を撮ってくれた優秀なラスムス君は、オクスフォード大学の博士課程に勉強しに行っているので現在はいないのです。残念ですがそういうことなので、ここに書かれた数字から半減していると考えて良いと思います。イギリスには王立古貨幣学協会のほかにイギリス古貨幣学協会というものがある、マークはそちらのプレジデントでした。

ケンブリッジ大学で勉強したおかげでいろいろなコネクションができて、オクスフォード大学からも来て良いと言われ、行ってきたのがこのアシュモレアン博物館です。外見はフィッツウィリアム博物館のほうが立派にも見えますが、内容的にはこちらのほうが良いかもしれないと私は思っています。これは中国貨幣に関する特別展があった時のものです。収蔵庫には漆塗りのコイン・キャビネットがいくつか収蔵されています。後でコレクションの話はしますが、18世紀後半から19世紀初頭まで日本で収集に励んだ朽木昌綱という丹波福知山藩主のコレクシ

ョンがイギリスに流出しているのです。大英博物館が所蔵している分は私がカタログに掲載しましたが、もっとたくさんのものがオックスフォードにあるわけです。このことは調べていくうちにわかったことで、コレクションの全貌についてはオンラインで見ることができますが、紙媒体のカタログはできていません。ここのところに1,600枚くらいあると書いてあります。このリセ・ヤンコフスキーというのはフランス人でパリに在住していますが、もとはアシュモレアン博物館に勤めており、単身赴任だったこともありパリに戻りました。私としては、彼女がここにいてくればもっと自由に仕事ができたのですが、彼女に橋渡しを頼みつつ今年も調査に行こうと思っています。漆塗りのコイン・キャビネットがあるということは、昌綱のコレクションがここにあって、おそらくその中から良いものを選んで大英博物館に持って行って売っているのです。ですから、大名がどんなものに入れてコレクションしていたのかという点で、漆箱の情報も大事だと思っています。一般的にはコインが整然と収納されていますから、学芸員は大変な数の貨幣を管理しなければならないので大変です。どこに何があるかを覚えておかなければいけないのです。図書館の司書と同じように、大変な数の貨幣を管理しているということです。

これは第1回目の時にもお見せしましたが、アシュモレアン博物館が富本銭を持っているのはびっくりしました。また、この時展示してあったのは、札も向こうの人には興味があるので、写っている5点の中に小判が1枚、銀貨が1枚、銭貨が2枚、札が1枚あります。(写真4) また、私がみたこともない古い英文の日本貨幣カタログがあり、何が書いてあるのかを確認するために読まなければならないので、誰かにやってもらいたいのですが、資料としては本当に宝の山です。日本の食堂には、今でも額に入ったお金が飾ってあったりしますが、これはその

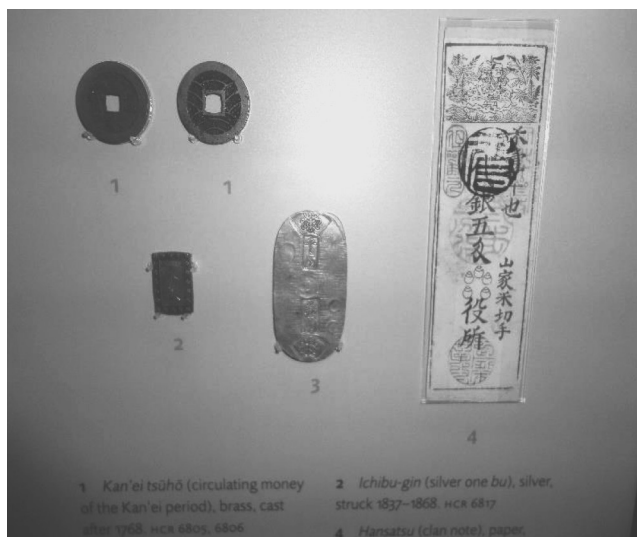


写真4 日本貨幣展示 (アシュモレアン博物館)

手の古い札とコインの額で、アシュモレアン博物館に収蔵されていました。実に荒っぽい話ですが、札は厚いので裏と表に分けて貼り付けてあるものもありました。

アシュモレアン博物館のホームページには、私と古田修久さんがこのデータの作成に協力したと書かれています。古田さんは私が最初にカタログを作った時からの研究パートナーであり、私の眼では古銭学的な詳しい判定はできないので、彼にすべてお願いしています。最新のデンマークカタログも古田さんの監修によることが表紙に明示してあります。ここで、古田さんという古銭鑑定のスペシャリストが書いたアシュモレアン博物館の資料内容について、私の解説を加えながら読ませていただきます。

「日本貨幣として所蔵されていた資料を分類した結果、展示中の5枚、中国銭が9枚、安南銭（ベトナム銭）が1枚、それから安南手類銭10枚。」手類銭は専門用語になりますが、ベトナムでつくられたのではないかという状態の悪い銭を安南と言い、差別用語のようなものです。「また、通貨ではない模造銭や玩賞銭、用途不明品、絵銭15枚を除く1,404枚のうち、明治以降の近代の銭もありますから、それを除いたら1,279枚でした。うち古代貨幣、いわゆる皇朝銭といわれるものは766枚もあります。それらはほとんどが出土品で占められている」というのはどういうことかということ、昌綱の時代に発掘して出土したものをコレクションとして昌綱が持っていたということになります。「中でも富寿神宝が230枚もある。」これだけでも古銭屋さんに持っていけば大変な額になるのですが、「一般的な皇朝銭全体に対する富寿神宝の割合と比較して著しく多いという特徴があります。」この理由はわかりませんが、おそらく古代の遺跡から出てきたものを昌綱が一括して手に入れたのだと思います。

「個別には、飛鳥池遺跡からの出土品と同タイプの富本銭」先述の1枚が含まれています。「これは火を被っていると思われ、歪んでおり少し状態は悪いですが、何とか判別できます。それから、古銭学的な分類で隆平永宝の二水小字と富寿神宝の示神大字というのがその希少性が極めて高く、文字の独自性も相まって称揚されている。」と指摘しています。だから、これらはコレクターから見たら絶対に欲しい、何百万円出しても1枚欲しいというようなものです。

「収集されている各種類の銭貨に対して言えるのは、コレクションにやや偏りが見られることです。また、それぞれに希少な品が含まれており、研究資料として貴重なものです。中でも大世通宝、世高通宝、金円世宝の琉球銭に関しては、現在細分されている個々の種別の多くを網羅しています。」つまり、コレクターですからバランスよくいろいろなものを丁寧集めているわけです。また、「永楽通宝の「永楽」の2文字を削り取って「大世」と下手な字で書いてあるのが一般的なのですが、ここには1つだけ、「大定通宝」の「定」の字だけを削って「世」と書いている珍しいものがあります。新規母銭と見られるものもあるし、長崎貿易銭の元豊通寶適勁大様母銭は特に大型かつ製作佳良な品で試作品とも考えられます。」長崎貿易銭については、中国の元豊通宝は行書か篆書ですが、これは我々が書く真書（楷書）となっており、日本でつくった元豊通宝なのです。長崎貿易銭は真書体なので、このことを知っていればすぐに

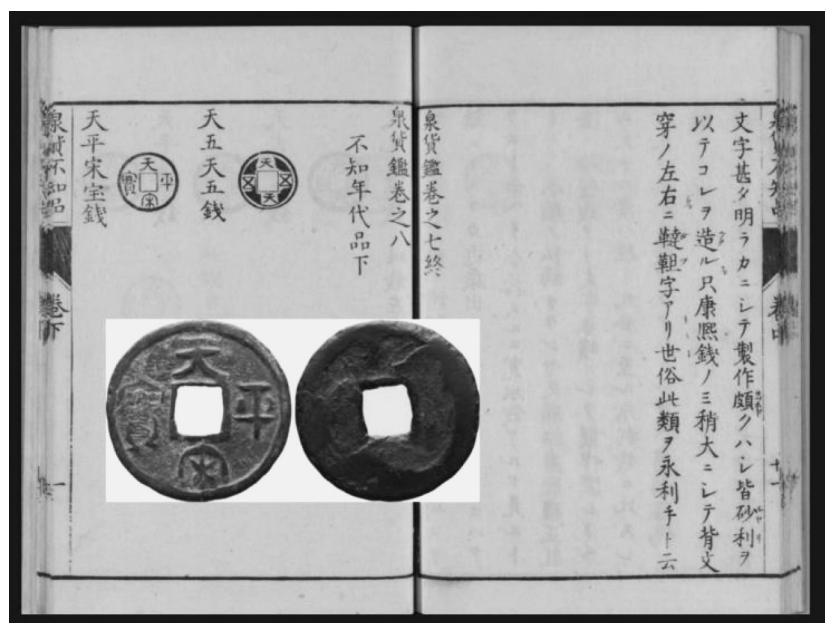


写真5 『和漢古今泉貨鑑』20巻と実物写真

判別できますが、その知識がないと中国のお金だと思ってしまいます。この資料は母銭なので、昌綱はおおもとのものを手に入れていたということです。

それから、昌綱が書いた本に『和漢古今泉貨鑑』というものがあり、その中には銭貨が描いてあります。正規の銭ではないものは1点物なので、現物があればすぐに照合できるのです。(写真5) これによって、博物館に残っている現物をここに書き込んでいることがわかります。ですから、単にモノ資料を見るだけでなく、本の形で残されている資料との照合も必要になってくるのです。文献史学か考古学かというようなことは言っていられない状況になってきていることをご理解いただければと思います。また、これは島銭といって得体の知れない銭という意味なのですが、漢字としては読めるような気もします。こういう銭が発掘品の中にもあります。昌綱のようなコインのコレクターは、こういうものは1点物なので欲しがるかもしれませんが、私はまったく興味がありません。

ここからは大英博物館です。ここはイギリスに行けば必ず観光客が行くところですから、皆さんも行ったことがあると思います。この時には日本の漫画『ゴールデンカムイ』の特別展覧会をやっていました。イギリスの博物館は基本的に入館料はなしなのですが、これは特別展なので入場料は高かったです。ここには毎年行っていて、展示内容が変わっているかないかを確認しています。近くには「スピंक (SPINK)」という、イギリスで最も有名な古銭のディーラーがあり、書籍も売っています。1660年代に創立した非常に由緒ある会社です。コイン関係の本を買いたい時には、大英博物館から歩いて5分くらいですから、行かれると良いと思い

ます。博物館には裏口があり、最近ではセキュリティが厳しくなっていて、裏口から入っても正面玄関から入っても厳しいセキュリティチェックがあります。それから、大きな貨幣常設展示室とは別にコインの特別展示室があります。今年行った時には、コインズ&メダルズを訪問する約束がしてあったのですが、この小さな特別展示室に行ったら鉄の扉が閉まっていました。人員が削減されたこともあって、ここはもう使っていないのです。この奥に研究室があるので、近くにいた係員にアポイントがあることを告げたら入れたのですが、いつも特別展がやれていたのは良い時代だったということです。

これも1回目にお見せしましたが、昌綱コレクションのチケットには、1884年5月11日に丹波福知山藩主の朽木昌綱のコレクションを Wills から買ったと書いてあります。(写真6) これはその通し番号が207番ということです。ここは通貨だけでなく、絵銭 (charm) もたくさん持っています。ただ、私は経済史が専門なので、このカタログを出した時には通貨にしか興味がなかったのです。ということで、絵銭についてはまだまったくデータ化できておらず、絵銭のカタログをつくることは仕事としてあり得るのかなとは思っていますが、できれば私自身ではやりたくないと思っています。

これは常設展示室に展示してある中国清朝の枝銭です。(写真7) なるべく無駄を省くために小さな小枝部分がありません。銭と銭がくっついて、原材料をなるべく少なくしようとしていることが読み取れます。展示品を両面から見えるように工夫しており、清朝の銭は裏側に造



写真6 大英博物館の昌綱コレクションとチケット
(大英博物館カタログ 51頁)

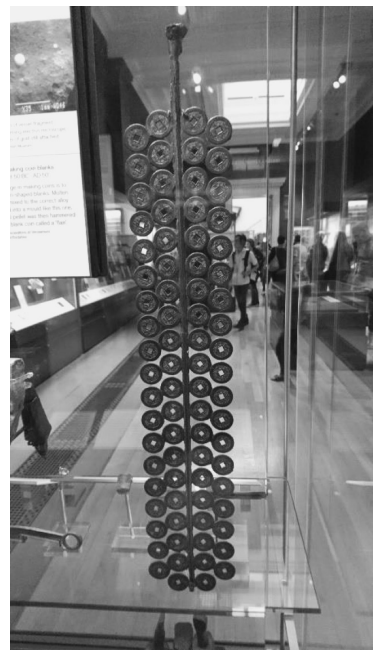


写真7 常設展示室にある清朝銭の枝銭
(大英博物館)



写真8 エレクトロン貨の展示
(大英博物館)



写真9 金貨の hoard 展示 (大英博物館)



写真10 大英博物館の獅子マーク入り小判
(大英博物館カタログ 198頁)

幣局の記号が入っていますので、それが見えるようになっています。

これは最初の貨幣とされるリュディアのエレクトロン貨ですが、(写真8) 皆さんも教科書的に教わったと思います。今日ここに来る前に少し時間があつたので、池袋の古代オリエント美術館に行きましたが、これは展示してありました。金貨の場合には普通、裏側にも神様などが打ってあったりしますが、これは何もないくぼみのような状態になっています。金貨の hoard はこんな感じです。(写真9) 銀貨については、ダイ(印型=Die)が2つ見えており、ハンマーも置いてあって、作り方を展示しています。また、これはスタックモールドと言って、枝銭タイプではなく重畳法という作り方です。日本にはこの製作技法は入ってきませんが、中国の古い銭にはこの作り方のものがあるので、大英博物館には展示してあります。

これも以前お見せしましたが、もう一回強調しておきます。大英博物館はオランダ東インド会社の獅子のカウンターマーク入りの小判を2枚持っています。最近では常設展示室でこちらの方が展示してあります。(写真10) 金貨ですからやわらかく曲がりやすいので、中央部で曲がってしまっています。また、獅子のマークが天地逆になっているので、東インド会社がマークを入れる時に、小判の上下を考えずに入れていることがわかります。また、これと同じタイプ

の小判が、去年私が行ったミラノのスフォルツァ城ミュージアムにあります。これにも「一両」と漢字はきちんと入っていますが、同じように獅子のマークは天地が逆になっています。10年くらい前に行った時には工事中で見られなかったのですが、今回は予約して行ったので見ることができましたし、写真も撮れました。さらに、この小判は東京で展示されていた時の写真で、現在はオランダのユトレヒトにある貨幣博物館が持っているようです。これらの写真でお見せしたものは非常に希少なもので、日本が17世紀後半にジャワにあるオランダ東インド会社に小判を輸出して、現在のジャカルタを中心に流通させていたものです。それらには獅子のマークを付けていたのですが、確認できるものは今のところこの4枚です。あと数枚あればいいなと思って探していますが、まだ見つけれられていません。海外に流出しているものに打たれたマークなので、当然日本にはありません。ヨーロッパや東南アジアで铸つぶされていなければ、富豪などが持っている可能性はあります。

去年の夏は、日本室に大判が2枚、五両判と小判が1枚ずつ展示されていたから、少しずつ展示替えをしています。大英博物館はたくさんの部屋に分かれていて、1日では見学時間は足りないくらいです。皆さんが行かれた際には、ぜひ日本室も見てください。

大英博物館をインターネットで検索すると、私が出版に強く関わった「Catalogue of the Japanese Coin Collection (pre-Meiji) at the British Museum」もあり、本自体は売り切れましたが、オンライン上でダウンロードできるので、研究者としては利用できれば良いと思っています。本にするだけがすべてではなく、大英博物館は再版しないということなので、公開しているもので見ていただくしかありません。

ここで朽木昌綱について少し説明します。非常にマニアックな話ですが、彼は1750年に江戸で生まれています。本来は藩主になるような人物ではなかったのですが、棚ぼた式に壮年になって藩主になりました。蘭学の師匠が前野良沢で、大槻玄沢のスポンサーでもあります。また、当代一流の学者たちと江戸で交わっていました。若い時からずっと江戸に住んでいて、藩主になってから国に帰りましたから、江戸っ子なのです。オランダ商館長のティチングと交際していて、ティチングもコインのコレクターだったのでコインの交換をしています。彼の家臣に非常に有能な古銭がわかる小沢辰元という人間がいたということも大事かと思います。また、昌綱からティチングに宛てたオランダ語の手紙が京都大学に残っています。本もたくさん書いていますから、彼は単なる古銭マニアのコレクターではなく、アカデミックに研究しようとしていたと私は評価しています。

これも1回目に紹介しましたが、富寿神宝の母銭を昌綱が持っていました。そして、古代の和同開珎以来、乾元大宝までのいわゆる皇朝十二銭と呼ばれるものの母銭は、この1点と奈良文化財研究所が持っている和同開珎とわずか2点しか確認できないというのが現状です。珍しいものを集めていたコレクター昌綱は、当時流通していた寛永通宝に対しても高い関心を持っていました。寛永通宝は昌綱の時代の現行通貨だったわけですが、その母銭を多く収集してい

ます。中にはその原型となるハンドメイドの彫母があり、彫母から錫は加工しやすいので錫母をつくります。次にそれをもとに銅の母銭、最後に流通銭をつくります。江戸時代は錫母が入ることで製作段階が1段階多くなっています。

昌綱のコレクションについては日本銭として分類されているもののみを調査していますが、模鑄銭の多くは中国銭名であることから、中国銭のトレイにも彼の収集物が収納されている可能性もあるのではないかと考えています。つまり、私は日本の銭は調査しましたが、中国のものについてまったく見ていないのです。今後の課題として、そこも確認する必要があると思っています。

『和漢古今泉貨鑑』や『彩雲堂藏泉目録』など、彼は自分の持っているコインについての目録をつくっています。それらの記載内容から、ここに収蔵されているものが昌綱の収蔵品の主たる部分を含むコレクションであることが確認できるので、古銭学の研究上重要な銭貨を数多く含んでいるのです。また、絵銭についても同様なので、さらなる調査をする必要がありますが、それはこれからの課題です。ですから、アシュモレアン博物館の資料をもう一度見直して、大英博物館のものと突き合わせて、最後は昌綱コレクション全体の復元を図ってみたいという思いがありますが、そこまで私が生きていられるかどうか自信がありません。昌綱が書いた本や、それに関連して藤原貞幹の『寛永錢譜』など、いろいろな書誌情報をここに挙げておきましたが、ここでは詳しい説明は省きます。

これは寛政4年(1792)の「愛古銭」で、当時のコレクターの番付表です。ここで西の大関に「桜田彩雲堂」と書いてあります。「彩雲堂」というのは昌綱のことで、当時どのくらいのコレクターがいて、どういう位置付けだったということがこれを見るときわかります。また、久野玄亀斎という人が書いた『玄亀斎藏泉記』という本がケンブリッジ大学の中央図書館にあり、刊行されないままこの1冊だけが残っています。書誌学に興味のある人はこういうものを研究されたら良いのではないかと思います。

当時の古銭の収集家は中国銭を集めるのがメインでした。つまり、日本では元禄くらいになって中国の銭がほとんど流通しなくなり、寛永通宝だけになった時に、珍しい中国銭を持っているということがコレクターの満足感になります。現在、我々が普通に手に取って見ている中国の古銭は、この時代に持っていったらすごく価値のあるものもあります。当時は中国銭の収集が彼らの大きな目的だったのです。例えば『和漢古今泉貨鑑』にはいろいろなお金が収録されていますが、第1巻の古文銭というのは中国の古いお金のことです。第2～4巻も中国銭で、次が諸国銭、不知銭(よくわからない銭)、厭勝銭、背文銭と続き、第16・17巻の近代和銭が寛永通宝などになります。このリストからも中国銭の割合のほうが大きいことがわかります。

古くは中国で12世紀に「泉志」という本が書かれています。日本ではそれを元禄くらいに孫引きしてやっとこの本が出ました。ガイドブックが必要になったということは、コレクターがそれだけ多くなったということです。それからは続々といろいろな古銭書が出版されるよう

になりました。書誌学の中でも古銭書だけを体系的に取り上げることは1つの研究になろうかと思えます。1つアドバイスしておきたいのは、刊本より写本がけっこう多いことです。我々は本というと印刷された刊本をイメージしますが、当時は書き写した写本がたくさんあるので、書誌学も大変に難しい学問分野だと私は思っています。

皆さんはあまり興味がないと思いますが、北宋銭には字体がいくつかあります。長崎の貿易銭は真書体だと言いましたが、中国の元豊通宝は行書と篆書です。そういう2つのセットになった書体があるので、それらを集めて遊ぶという古銭マニアならではのゲームがあり、それを明らかにしたのがこの『符合泉志』という本です。

さきはどティチングの話をしました。彼は昌綱と交流をしていて、これは昌綱からティチング宛ての手紙の翻訳です。1行目だけ読みますが、「逆ぎり小判1枚。紋章が逆さに刻してあるので、逆ぎり小判と言われている」と。大事なのは、「1000番目につくられたものがそうになっている」と書いてあることで、これは他の記録のどこにも残っていないのです。デンマークカタログの貨幣写真は私が貼り付けたのですが、上下逆のものがあります。資料を実見した時に「上下が逆」とメモしていますから、これは貼り付けミスではないのです。なぜこういうものがあるかを昌綱が書き残してくれており、1,000枚毎につくっていることがわかりました。そして、珍しいものだからそれをプレゼントしますと書いているのです。

ティチングは来日した3回のうち2回、参府しています。おそらくその時に昌綱と会っただろうと考えられます。二人は江戸で遭遇しているだろうと推測できます。

これは今年からやらなければいけないパリの資料写真で、パリにある Bibliothèque Nationale (国立図書館) 貨幣部門のコイン・キャビネットです。ここに JAPON とありますが、日本貨幣がこういう引き出しに入っていて、大阪商業大学の加藤慶一郎さんと愛知学院大学の勝亦貴之さんと一緒に調査に行った時の写真です。

現在、この資料は別のところに移っており、これはパリのオペラ座の近くにあった時に調べに行ってきた時のものです。私はその時のデータを持っており、あと1〜2回、現物をチェックすれば完成するレベルなので、日本学士院カタログの第2巻をつくらなくなると、仕事としては早くできるということがあるので、今はそれを考えています。

これはビラレ (Villaret) というフランスの軍人で、1884〜1889年に来日していた人のコレクションです。ここに筑前通宝があります。江戸時代の終わりに天保通宝が流通するとなると、同じ形をした土佐通宝や天保通宝の偽物もいっぱい出るのです。笑い話のようですが、明治になって天保通宝を回収したら発行高より多かったのです。これは1文よりは価値があるので、皆が偽造するわけです。たとえば、天保通宝と形は同じで、名前だけ琉球と変えたものをつくって良いかと、薩摩藩は幕府に申請してOKを取ります。ところが実は天保通宝をつくっていくというあくどいことをやっています。いろいろな藩が天保通宝の偽造をしたのです。

ヨーロッパ人は、ヨーロッパとお金の作り方が違うので枝銭が好きようです。この枝銭を

見ると、上の3枚には「南無阿弥陀仏」という念仏が書いてあって通貨ではない。でも、下の4枚は寛永通宝となっており、このようなものを適当につくっていたのですね。また、当時のコレクターはいろいろなことを銭そのものに書きつけていたりするので、これからそれも読んでいかなければなりません。このように写真に撮って記録しておけば、後で誰かが研究できます。現在の私には時間的余裕がありませんので、写真を撮っておきました。

ここで千枝さんに、アメリカのアメリカン・ヌミスマティック・ソサエティの話をしてもらいたいと思います。

千枝 中京大学の大学院や三重短期大学等で非常勤をしている千枝です。私は元々、日本中世の文献史料から永楽銭といった金属貨幣を高木久史さんたちと一緒にやっていたのですが、だんだん時代的な関心が下がってきて今は、あまりやっている人がいないこともあり江戸時代の紙幣を専ら研究しています。

私は愛知県よりも三重県にいるほうが長かったので、山田羽書という、経済史の教科書などには日本で最初の紙幣ということで出てくる地域通貨ですが、著名な存在の割にはその研究をしている人が少ないということがありましたので山田羽書を研究しています。

それをするにあたって、古い時期、特に17世紀代の場合はあまり山田羽書関連の文献資料が残っていない現状があるため、櫻木先生とお付き合いする中で現物の資料から分析する手法を学び、それを前近代日本紙幣史の分野に応用する形で研究を進めています。

特に、山田羽書は現物資料として扱う場合、その券面などには文字情報がありますので、それらの情報などから歴史的情報を検出してみたらどうかということで、去年はブルガリアで発表したのですが、2年前には櫻木先生と一緒にワルシャワで話をしました。

また、日本の貨幣にあわせて信仰のことや、宗教のことを少し調べていて、コロンビア大学で1回、日本の美術史と宗教史に関連するシンポジウムがあったので、報告のためニューヨークに行ってきました。その際、近世日本の民間紙幣に関する科研の研究分担者であったこともあり、どこか海外の研究機関で関連資料を見てこいということでしたので、とりわけアメリカにはまだ誰も行っていないということだったのでニューヨーク州マンハッタンにあるアメリカン・ヌミスマティック・ソサエティ（アメリカ貨幣学協会）と、さらにメトロポリタン美術館、アメリカ自然史博物館などを回りました。

結論から言うと、メトロポリタンには小判などが描かれている浮世絵はあるのですが日本貨幣は1枚もありませんでした。聞いてみるとコインはヌミスマティック・ソサエティと契約しているので借りて展示するというやり方で、日本のものに限らずコインは集めないという方針のようなので、それらを調べるならばヌミスマティック・ソサエティにありますよということでした。自然史博物館のほうには銭貨や藩札を含めて前近代の日本の貨幣は50点はなかったと思います。そのため、ニューヨークで前近代日本貨幣が一番多い研究機関はマンハッタンにあるアメリカン・ヌミスマティック・ソサエティではないかと考えています。

私は日本紙幣を調べるということでデータを取ったのですが、だいたい700枚くらい所蔵していると把握しています。日本の硬貨も沢山ありますが、そちらは時間がなかったのもまた今度ということでしたが、日本貨幣自体を閲覧している人もほとんどいないようで、とりわけ、紙幣に関しては私が初めてということでした。整理した人は中国のキーパーだったということで、日本の貨幣はよくわからないとのことでした。そして、その人ももう辞めてしまったので、今はデービッド・ヤンという西洋貨幣が専門の研究者が管理しているのですが、全然わからないのでどうぞ見てくださいということで、2回ほど調査しました。

ところで、私は博物館学の授業の時に貨幣のことを1コマだけ教えていて、今日は偶々、そのスライドがありましたので大学生向けの資料ですが櫻木先生のPowerPointの資料に繋げて投影したいと思います。こういう形で、あちらの博物館ではジップロックに入っているものもありますが、大半の日本紙幣はアルバムに貼ってあります。聞けば、H・A・ラムスデンという人から買ったということですが、その人はキューバの領事館長であり、また貨幣コレクターで横浜古泉会のトップだったという方です。

ただし、ラムスデン関連の日本貨幣資料を扱う際に面倒なのは、彼は贋作をつくっていた人物であったということが挙げられます。紙幣は該当しないと思うのですが、コレクター用語で「ラムスデン作」という言葉があって、贋作していたことが露見しないように日本では販売・流通させないで、ちょっと珍しい日本の硬貨などを大量に海外に売っていた形跡があるのです。つまり、ラムスデンは奥さんが小早川さんという日本人であったため、彼は弟の小早川潤と一緒に小早川商会という輸出入雑貨商をやっていたのですが、そこを通して日本貨幣の本物はもとより贋作を国外に大量に流していたようです。

そのラムスデンが持っていたというものの一部をアメリカン・ヌミスマティック・ソサエティが購入していて、さらに、ヌミスマティック・ソサエティ所蔵のラムスデンコレクションの片割れがボストンに流れていて、ボストン美術館かピーボディ・ミュージアムのどちらかが購入したという手紙が残っていて、私も一部見せてもらいました。

スライドの写真11をみると、日本紙幣の多くは、アルバムに挟み込まれる形になっているのがわかりますが、左から2つ目のものが度会府札という、明治元年に発行、翌年から通用した最後の山田羽書と言われるものです。明治政府の度会府が出したいわゆる府県札であって明治時代の三重県のお札、さらにその左右にあるのは三重県の江戸時代の藩札です。左側は桑名藩発行の藩札、右側は三重県北部の神戸藩が発行した藩札、というように全国的な藩札があります。

ヌミスマティック・ソサエティのコレクションには山田羽書の現物がなかったので、そのかわりに私がかつて持っていた山田羽書の写真をスライドに添付しています。私はデービッド・ヤンとたまたまワルシャワで再会した際、偶然にも私を買った山田羽書があり、ヌミスマティック・ソサエティには所蔵されていないことはわかっていたので、私は再会の記念としてデー

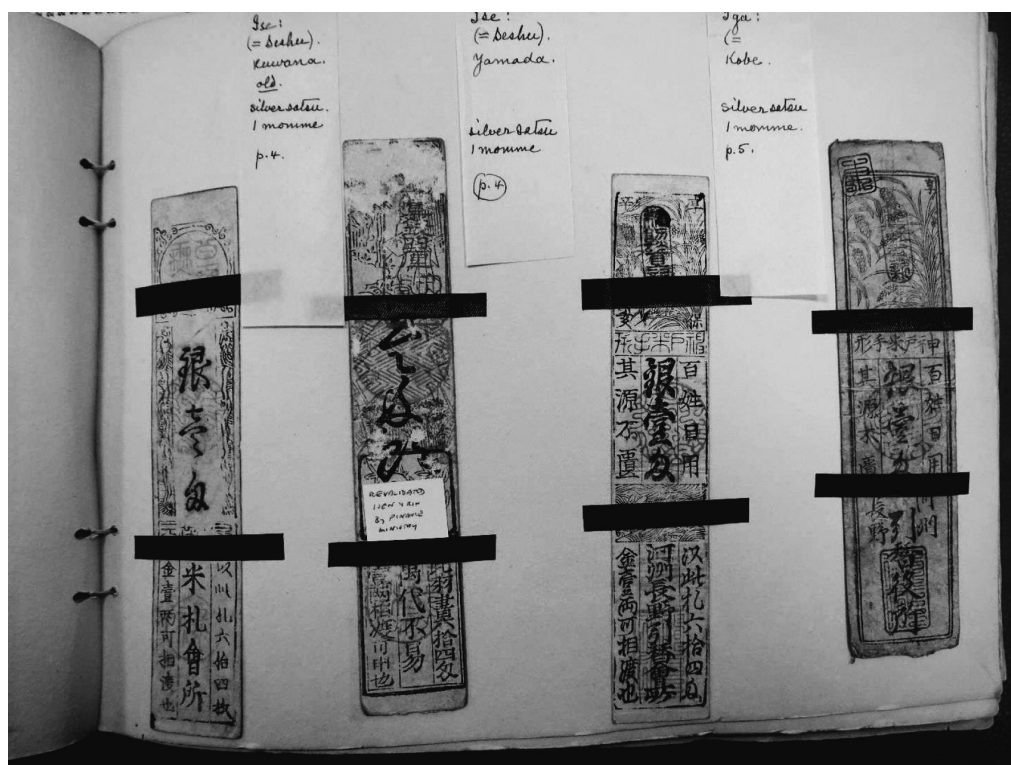


写真11 日本紙幣アルバム（アメリカン・ヌミスマティック・ソサエティ）

ビッド博士に私物の山田羽書をプレゼントしました。私が購入した1枚はそれほど古い山田羽書ではなく文久3年発行のものです。彼に日本には山田羽書という古い紙幣があるということをアメリカで紹介してもらいたいと思ってのことです。私としては、デービッドに個人的に差し上げたつもりだったのですが、彼は私物化しないでヌミスマティック・ソサエティの収蔵品として扱ってくれたため、帰国後にヌミスマティック・ソサエティから公式に受け取ったことを示すメールが私のもとに届き、こういう受領証が発行されました。この寄贈エピソードは、博物館資料論で寄贈による博物館資料の収集などの話題の際に紹介しています。

たぶんここはアメリカで日本紙幣が一番多く、私が寄付した山田羽書1枚も含めて700枚くらいあるので、今後論文化するなどの形でまとめていくのが課題かなと思っています。

櫻木 コイン以上に藩札や私札の研究は進んでおらず、その一番先を走っているのは千枝さんであるということです。一応、ここで切りましょうか。

菊池 ここまでで質問やコメントがあれば、どなたからでもお願いします。

安士 藩札と私札というのがありましたが、私札というのはどういう意図で製造されたのでしょうか。

千枝 一般的に言われるのは、藩札というのは藩が商人に頼んで出す公的な存在ですが、私札

は発行や通用をめぐる藩が関与しないプライベートな商人が出している札ということですが、最近ではその位置付けの見直しもあります。そもそも、「私札」という言葉自体、学術用語からスタートしたのではなく近代にできたコレクター用語であり、また、江戸時代に集めていた人はほとんどいないようです。それが、明治維新になった段階で藩札が処分されて太政官札や明治通宝、さらに日本銀行券になっていくわけですが、明治の早ければ中期くらい、とりわけ、だいたい大正前後、すなわち明治末～大正、昭和初期くらいにすごく人気が出て、ついには一大コレクターや藩札専門の古銭商も登場するまでの藩札の収集ブームが到来するようになります。

そもそも、藩札というのは、藩が出している紙幣とわかるのですが、私札というのは商人などが出している類のものです。ただ、山田羽書の場合には、私札と言いながらも、完全に幕府の目が届かないところで何十万枚と出そうということではなく、届は一応出しているのです。ややこしいのは、私札型藩札とか、藩札型私札というようなコレクター用語もあって、高木さんなどがもう一度定義付けを見直す必要があることを提言しています。

そもそも藩札という言葉が江戸時代にはないのです。明治になってから、藩がなくなってから「藩札」という言葉ができて、それまでは「楮幣」とか「銀札」または「金札」、つまり金や銀と交換できる札と史料上でてきます。東日本ではあまり使われなくて西日本、とりわけ東海地方から九州地方の諸藩が盛んに出しているのですが、中には九州や四国のもので「銀札」と書いてあっても実際には銭貨取引使う「銭札」だったりしてややこしいのですが、史料によく出てくるのは「銀札」という言葉なので、これらの問題を考慮して、単純に「札」や「ふだ」という言い方が正しいだろうと考えています。

私自身は、わかりやすいので「藩札」という言葉を使っていますが、外国でもケンブリッジや大英博物館の研究者に渡した時に「OH !! HANSATSU」と言われたくらい専門家の間では世界的に通用している言葉ではあるのですが、「藩札ではなく私札ですよ」と言ったら、それは全然知らないということでした。そういうこともあって、櫻木先生と一緒に書かせていただいた論集でも私札について少し触れたのですが、原則論としては、諸藩の藩主などの影響力はほとんど入っていないということで商人などが出しているものが私札であると現時点では考えています。ちなみに、人足の宿場で出したものは「宿場札」とか「商人札」と言ったりするのですが、それらも厳密に言えば学術用語ではないのです。

このように私札は、そもそも古文書といった歴史資料に出てくる歴史用語ではなく、いわばコレクターの世界からスタートしている用語なのです。その辺の問題もあってか、定義付けを行う上でわかりづらいところがあり、例えば商人の名前が入っているので藩札ではなく私札だろうという意見も出るわけです。実際にコレクター界でも、「私札です」と従来は紹介されていたが実は調べ直すと藩札だとわかったのでこの度訂正しますということがしばしばあります。そのため、藩札のカタログでは、第2版から藩札として掲載されることがよくあるなど、学術

資料として私札や藩札を扱うには、なかなか難しいところがあります。

これは古銭学の金属貨幣のほうでも、例えば、わからなければ安南銭ということにしまっている銭貨が、もしかしたら安南産ではないかもしれないということもあつたりしますので、コレクター用語をどういうふうに学術用語に昇華させていくかということは1つの課題かなと思っています。

安士 ありがとうございます。

櫻木 用語規定が十分にできていなくて、これから本格的にアカデミックな世界の中で処理していこうとしているレベルです。今の話の中で大事なのは、コインのコレクターが元禄くらいから出現し、寛永通宝が流通銭の主流になってきた時にコインが集められるようになったのと同じように、藩札も江戸時代に集めていた人はいないのです。明治になってから収集は始まっており、私はヨーロッパで日本の札類も探し回ったのですが、ほとんど見つかりませんでした。つまり、コレクターの歴史が短いのです。

千枝 例えば、山田羽書の場合は、慶長・元和年間といったすごく古い山田羽書などは古文書集の中で模写されていますので、興味を持った一部の人はいるのですが、集中的に集めているような形跡はないので、近世にはあまり流行っていなかったのだろうと思います。それが、藩札処分を経た近代になるとレア度が上がって収集する人が増えたということなのではないかと考えています。

菊池 今の話で気になったところがあるので素朴にお聞きしたいのですが、イギリスやアメリカなど国外の博物館スタッフの日本貨幣に関する理解度といいますか、日本貨幣を考古学的に取り扱う習熟度は、感覚的にいつてどのくらいのものでしょうか。スタッフの知識が十分ではなく、少なからず誤解して整理分類されてきているようにも思うのですが。

櫻木 私が今まで見てきた限り、外国では日本の貨幣を古銭学的に分類できる学芸員はいません。日本貨幣についての専門家がまったくいないと言って良いと思います。では今まではどうやって分類をしてきたかという、ケンブリッジ大学では学芸員ではないいわゆるマニアが、ボランティア的に資料を見ながら分類をし、チケットに書き込みをしてくれています。だから、我々が行って貨幣の同定をしてあげると、向こうはすごく喜んでくれるわけです。

菊池 ヨーロッパには日本学という分野があります。19世紀に確立したものですが、日本に来てきちんと勉強せずに、独自の解釈をしながら独自に発展してきた側面があり、日本に関するステレオタイプの誤解が散見されます。そうしたところが貨幣考古学にもあるのだらうとお聞きしました。日本に勉強しに来ることはあるでしょうか。

櫻木 外国人の研究者ということですね。それはあるでしょう。

菊池 それは活発でしょうか。

櫻木 活発ではないと思います。ケンブリッジ大学の中でも日本学そのものがシュリンクしているわけです。日本の国力低下とともに中国学のほうが盛んになって、日本学は衰えている。

私の研究仲間であるピーター・コーニッキー名誉教授が言うには、ケンブリッジ大学の日本学科にも古文書を読めない日本史学者がいるとのこと。漫画とかサブカルチャーが日本学者の研究対象になっており、歴史家ではない研究者が多くなっている現状を嘆いています。

菊池 私の専門はドイツ史ですが、日本では西洋史をするなら必ず留学しろと言われました。その逆方向はあまりないような感じがします。

櫻木 その通りだと思います。

千枝 専門家はいなくて、例えばアメリカ自然史博物館では、日本の金属貨幣のほうも調べてくれと言われて寛永通宝なども出てきて、目録もあったのですが、そこには寛永通宝は1300年代の銭貨と判定され記載されています。寛永通宝といっても色々種類があって、その中の何銭かということは私も現在でも勉強中なので詳しくはわかりませんが、それでも、上限は寛永通宝の初鑄年は寛永13年（1636）ですから、その年よりさかのほらないことぐらいはわかりますが、自然史博物館では江戸時代以前の貨幣と判断されている、そういうレベルです。自然史博物館のデータベースを見ると「Paper Money or Card」などとあって、日本の紙幣か証券というカテゴリーで藩札などの日本紙幣が入っていました。これらのことから考えると、日本貨幣を整理した人は日本人でない可能性があります。ちなみに、アメリカン・ヌミスマティック・ソサエティの日本貨幣を整理したのは中国人ということでした。

ワルシャワに行った時に山田羽書についての質問があって、どのくらいの信用力があったのかと細かい質問をしたのはアメリカ人で、研究者かと思ったらコレクターだそうです。他のセクションでは、イエール大学の学芸員だったかと思いますが、その人は小判について質問されて、興味のある人はいるようですが、アメリカにもあまりいないようでした。名古屋にはコレクターが多いので世界規模での古紙幣のカatalogはないかと聞いたところ、『WORLD PAPER MONEY』という本があるので読むと良いと言われたのですが、アマゾンでは取り寄せられませんでした。『WORLD PAPER MONEY』は、権威のある海外の古紙幣Catalogのようで、それを海外のコレクターたちは見ているようです。このように、博物館や大学の研究者ではないところで紙幣を集めたり研究したりしている人が意外と多いと感じています。

菅沼 私はデンマークを研究しています。ご著書を拝見したらデンマークにはコレクションが多いと書かれています。それはなぜなのかなと疑問に思いました。デンマークには東アジア会社という非常に大きな商社が19世紀末～20世紀にかなりアジアで活躍しました。そのようなデンマークのアジア交易と関連があると考えてよいのでしょうか？

イギリス、フランス、アメリカ、ロシアとコレクターのいるところで非常に発達しているように思われて、コレクターと貨幣史研究というのは極めて密接な関係があって、なおかつそれは帝国主義というか、帝国のところで貨幣史が発達したような印象を受けたのですが、それはいかがでしょうか。

櫻木 デンマークについてはこれから話しますので、それでお答えに代えさせてください。後

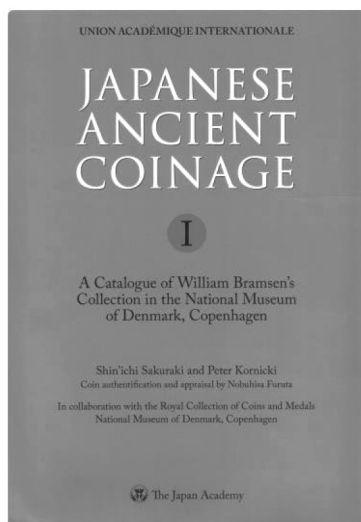


写真12 デンマークカタログ（日本学士院，2023年）

半の質問については確かに、コレクターがいたところに学問が発達したというのはその通りだろうと思います。モノがないことには研究できないし、ケンブリッジ大学の研究者が明治初期の日本に来た時に、個人的にモノを持ち帰るなどしているケースがいくつもあるので、やはり帝国主義的なというか力が働いてモノが集まり、それを元にヌミスマティックという学問が発展したというイメージに私も賛成します。

今、デンマークのお話が出ましたが、これがデンマークの貨幣カタログです。（写真12）なぜここに日本貨幣が収蔵されているかという、ウィリアム・ブラムセン（William Bramsen）という人物がおり、彼は大北電信の社員でした。明治の初期に上海から長崎に海底ケーブルを引く仕事をデンマークのこの会社が入札し、彼が通信士として長崎にやってきます。彼は上海に駐在していた時から古銭の収集をしていて、日本に来てからも収集を続けました。

彼のすごいところは、和洋対暦表を作ったことです。日本の古事記などを見ると、天皇が何百歳も生きていると書いてあり、それはおかしいと考えて暦をつくったのです。日本政府よりも日本の暦を先につくった傑出した人物です。彼はそういう高い日本語力があったので、デンマーク人で三菱の重役になっていたオットー・クレプス（Otto Krebs）が彼を三菱に引き抜きます。それで彼は三菱に移って、東京で活動することになりました。デンマークにすごく良質なコレクションがあるのは、彼のおかげなのです。

コペンハーゲン大学名誉教授である長島要一先生は、彼のコインコレクションについていろいろところで少しだけ紹介してくれていますが、実際に調べてはいません。古銭の研究はそれだけ難しいのです。私は長島先生とも連絡を取って、この分野についてはまだ明らかになっていないので、私が研究しますと言ってやらせていただきました。

ブルムセンは31歳で亡くなりましたが、わずか10年足らずの期間で、三菱からもらっていた給料が良かったこともあり、すばらしいコレクションをつくりました。三菱史料館にマイクロフィルムの形でいろいろな記録が残っているので調べてみたら、明治8年と12年のことですが、月給は150円、300円とあります。当時、お雇い外国人として紙幣をつくっていたキヨッソーネは450円もらっており、伊藤博文が500円ですから、30歳にもならないような若者が高額給料をもらっていたということです。その資金力をもって東京の古銭界で活動していたわけです。そのコレクションがヨーロッパに持ち帰られ、彼が亡くなった後にコペンハーゲンの博物館に入って、現在では超一級資料となっています。

調べていておもしろかったのは、彼は遺言にこのコレクションを大英博物館に買ってほしいと書き残していましたが、大英博物館はそれを断っています。というのも、先ほどお話ししたように大英博物館は1884年に昌綱コレクションを購入しているのです。つまり、ブルムセンのコレクションと比べると昌綱コレクションのほうが良いから、それを買った直後だったので断ったのだらうと私は推測しています。しかしながら、その結果として彼のコレクションはデンマーク国立博物館に寄贈され、私たちがカタログを出すことができたということです。

ブルムセンは英語の日本貨幣論を2つ書いていて、1つは日本の貨幣史、もう1つは鉄銭についてです。幕末の日本で流通していた大半の銭貨は寛永鉄銭だったと言われており、銅銭は退蔵されてしまっていました。彼の貨幣に関する研究業績を明らかにすることで、彼に対する供養の気持ちを表したかったから、カタログにはこの2つの論文も収録しました。

彼は真面目な人で、愛妻家だったようです。ただ、三菱史料館の資料を調べてみたら変なことがわかりました。彼の正妻は「タキ」なのですが、史料の中に「ブルムセンの妾のチヨ」という記事が出てきたのです。この真相探求は今後の課題とします。

また、当時の有名な古銭家である鬼頭久吉は彼のことを「ブルムセン先生」と呼んでいます。そのくらい彼の古銭コレクターとしての地位は高かったということです。古銭番付を見ても、ブルムセンの名前が張り出しのところに書かれており、その横にはシーボルトの名前があります。彼は日本史に出てくるシーボルトの次男で、古銭のコレクターとして知られていました。現在、彼のコレクションはドイツのイエナ大学に収蔵されており、ここの資料はチケットだけでなく、きちんとした個別の貨幣リストがつくられています。

三菱はブルムセンに対して、ロンドンに行って海事法の勉強をするように命じます。その時に、上野の精養軒で送別会をやったということが、1880年10月22日の東京横浜毎日新聞の記事に載っています。

これは右がクレプスのコイン・キャビネット、左はブルムセンのコイン・キャビネットです。(写真13) 私が最初に行った時には、コーニッキー先生、高木久史さん、今年から同志社大学の准教授になった古賀康士さんの4人で行ったのですが、その時のものです。ブルムセンのコレクションが少しだけ元のキャビネットに入っていましたが、多くは新しい収蔵庫の中に納め



写真13 ブラムセンとクレブスのコイン・キャビネット（デンマーク国立博物館）

られていました。クレブスのコレクションはキャビネットにそのまま入っていて、120枚あったはずですが、2枚だけ欠落がありました。また、古銭書である銭譜もたくさん残されています。日本語が堪能だったので勉強していたのですね。

現在の収蔵状況は、大きなトレイに移されています。枚数はクレブスが118枚で、トータルが1,278枚ですから、クレブスの分を引くとブラムセンの旧蔵品は1,160枚となります。しかし、当博物館の学芸員が書いた論文を読むと、古い時代に日本貨幣コレクションが10枚あったが、今はどれかわからないということです。おそらく正確な数はこの数字から10枚引くのだと思いますが、モノが特定できないので今のところはばかして表現しておきます。

コレクションの内容は、寛永通宝が386枚あって、母銭が半分近くありますから、質は高いことがわかります。いま財布の中に入っているコインの中からコレクションするのではなく、未使用のものを集めているというイメージです。「幕末の試鑄貨」と赤字で書いているところは研究上大事なことを考えており、これは通貨ではなく、試しでつくった貨幣なので実際には流通しなかったのです。それが体系的に集められているので、これらを研究するのは今後の課題になります。

寛永通宝をつくる時には、彫母から錫母、銅母と少しずつサイズが小さくなっていき、流通銭が一番小さくなります。それから、たくさんあるお金の中で一番新しいものはどれかを探することが大事で、遺物の時期はそれよりも新しくはならないという最新銭のお話です。ここにある最新銭は明治11年の5円金貨で、彼が亡くなったのは13年だから矛盾しません。ちなみに、これは現在1枚120万円、明治3年の20円金貨は1枚800万円するそうです。

この5円金貨のデザインは有名な金工師である加納夏雄のものです。また、760年につくられた開基勝宝という金貨を加納夏雄がコピーしたものが1枚ありました。（写真14）これは第



写真14 加納夏雄作「開基勝宝」(径24mm)
(デンマークカタログ 172頁)



写真15 武蔵墨書小判
(デンマークカタログ 175頁)



写真16 佐渡小判
(デンマークカタログ 178頁)

1回で話しましたが、奈良の西大寺で江戸時代に出土したものが1枚だけあり、昭和12年になって31枚が出土したのです。江戸時代に出土した1枚を皇室に献上する時に、西大寺が加納夏雄にコピーをつくらせたのです。ですから通貨ではないのですが、来歴がきちんとわかる資料です。私はこの1枚しか存在を知りませんが、おそらく10枚くらいはあるはずなので、コレクターが秘蔵しているわけです。

ブラムセン・コレクションはとてもバランス良く優品を集めています。大判や墨書小判もあり、ワルシャワで学会発表した時にこの墨書小判(写真15)は本物であると話したのですが、今はフェイクと考えています。例えば、この裏面の中央にあるマークを見ると日銀にあるものと違います。マークが2種類あったのであれば本物かもしれませんが、日銀のものが正品だと

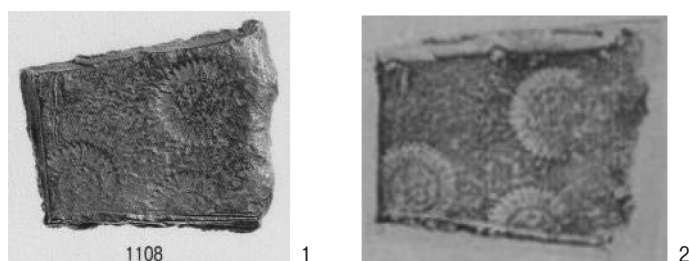


写真17 切銀（デンマークカタログ 234頁と『月旦衆評泉譜』14号）

すればこれは違うということになります。墨書小判はコレクターの間で流通するほどの数が存在しないので、ブラムセンのものを最初に見た時はすごいと思いましたが、どうも本物ではないようです。太閤円歩金もあり、これは西洋風の貨幣に見えますが、ブラムセンが集めたものはフェイクです。

また、どの本にも載っておらず、これまでに見たことのない金判がブラムセンのコレクションにはいくつも含まれています。甲州金では「松木」と打ってあるものは多いのですが、「山下」は非常に少なく、それが含まれています。さらに皆さんにお伝えしておきたいのは、慶長になると長四角形の一分金が登場しますが、表に「一分」と縦2文字書いてある「額一分金」はそれより古いもので、1枚400万円くらいするそうです。この佐渡小判は珍しいもので、佐渡の「佐」というマークが裏面右上に打ってあります。（写真16）

銀貨の形は多様で、最初は重さを量って切り遣いされていたものが、のちに計数貨幣化するのが経済史的に大事なことです。それから、幕末近くなると秋田などで地方銀貨が出されます。西洋人は金貨や銀貨をよく収集しています。また、この「切銀（古極印切銀）」は非常に珍しいものです。（写真17-1）初期の頃には銀は切って遣っていたのですが、地方の銀貨を切り遣いしているところが非常に珍しいと思います。

ここには皇朝銭も並べて載せておきました。仙台通宝の彫母もありますが、こちらは流通銭である鉄銭です。このポイントとしては、幕末の試鑄貨が非常に多く含まれていることです。これらは日銀の『図録 日本の貨幣』の中にも掲載されており、それを使って安国良一さんが論文を書いています。住友が銅を売り込む時に、こんな新しい貨幣をつくったらどうかといった提案をするので、その史料が住友にあるのです。安国さんはそれらを使って『住友史料館報』に論文を書いているので、興味のある方はご覧ください。

日銀の図録と同じくらいの資料数がこの1冊の中に入っており、よく見るとそれぞれ違います。特に考えてほしいのは、ここに1枚で200とあり、（写真18）天保通宝は100文なのですが、これは200文です。また、同じ形のこれには2枚で1朱と書いてあり、金貨の単位を使おうとしているわけです。幕末の混乱期に、通貨をどうしていこうかと迷っていることが読み取れるような資料なので、これはもう少し真剣に検討をしなければいけないと思っています。ここに



写真18 慶応通宝（径44mm）（デンマークカタログ 168頁）

は「1朱で2枚」と書いてあるし、ここには「200文」とあり、いろいろな試作品をつくっているわけです。これには「当五十」と書き、いろいろなタイプを考えたものの結局、日の目を見なかった。慶応通宝ですから、慶応年間であることは間違いないと思いますが、いろいろなことが考察できるということで、ブラムセン・コレクションのすばらしさと感じます。

それからこれらは全部、土佐藩が出したものです。この土佐通宝は、裏側が波ですから4文銭をイメージしていますよね。これは天保通宝の偽物みたいな感じですが、こういうものも考えていたわけです。また、これは土佐山内家の家紋で銭貨の側面に打たれています。彼のコレクションには、こういう地方貨幣がたくさん含まれています。

あとは、『月旦古銭会』という会が出しているカタログがあります。身内だけのカタログなのですが、国立国会図書館に入っています。蔵書印を見ると「宇都宮」とありますので、宇都宮壽綱という人の持っていた本が国会図書館に入っているということです。ブラムセンもそのカタログを持っていて、デンマークにもありました。国会図書館のものより状態が良く、欠けている巻がないので、わからないところをブラムセンのカタログで補足できました。残されたカタログを見ると、11～35号まで彼が参加しており、会をいつどういう料亭でやっていたかもわかります。また、誰が中心で仕切っていたか、誰が何を出品したかもわかります。だいたいは自分が持っている中から自慢のコインを出すわけです。そして、出品されたものは拓本を採っていて、23号までは採った拓本を貼り付けています。24号以降は本の頁に直接拓本を採るスタイルになっており、拓本の打ち方が変わっていることもわかります。

例えば、これから明治11年11月25日はデンマーク国ブラムセンが会主となったことがわかります。日本人の中に混じって、一流の古銭家として活動していたということです。ここに載っている拓本をもとに、カタログに収録されている現物を探すと、例えば享保通宝銀銭の拓本がありますが、よく見ると「通」の円周部分がわずかに欠けています。（写真19）拓本にも良いところがあって、写真より正確にわかることがあるのです。先ほど貴重な切銀とお話したものはこれです。（写真17-2）残念ながら、カタログには載っているが収蔵されていないものも

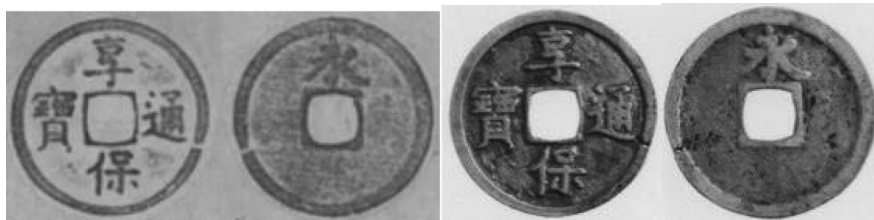


写真19 (『月旦衆泉譜』13号の拓本と「享保通宝」デンマークカタログ 165頁)



写真20 文字が二重の和同開珎 (デンマークカタログ 130頁)

あります。それは現物を持ち帰れなかったのか、理由についてはわかりません。

これは和同開珎ですが、(写真20) 鋳型に母銭を2回押したもので、文字が二重になっています。これはブラムセンの旧蔵品のため現在はデンマークにあります。カタログの別の号を見ると、何号か前に違う人の所蔵品として掲載されています。つまり、その人からブラムセンが買ったのか、譲ってもらったのかして、彼のコレクションに入ったことを意味します。

以上がコインコレクションの概要です。さらに、これらは彼が持っていた古銭書です。これはピーター・コーニッキー先生が専門で、ブラムセンが持っている写本は、秘伝書に近いものが多いそうです。つまり、彼は非常にレアな写本をたくさん持っていたわけです。このことは、とてもおもしろい書誌学の研究テーマになるのではないかと思います。また、この部分を見ると、「ブラムセン大先生」と書いてありますので、そのくらい彼はリスペクトされていたデンマーク人だったということです。

スウェーデンのストックホルムにある王立貨幣博物館でも調査をしました。近くにはノーベル賞博物館もありますが、残念ながらそこには行きませんでした。ツインベリーというオランダ商館に来ていた人物がいて、スウェーデン王立アカデミーで日本貨幣についての講義を最初にした人ですが、その人のコレクションがここに入っています。このように彼のコレクションは展示されていますが、(写真21) これらの現物貨幣を調査する時間はなかったので、いずれ再調査に行くことになると思います。この時は科研で藩札を調べに行っていたので、研究室で藩札だけを見せてもらいました。これがその中の1枚で山田羽書ですが、非常に珍しいものだそうです。

千枝 明和7年(1770)発行の山田羽書であり、今日本の古物商で購入すると、たぶん数十万

これはミラノのスフォルツァ城ミュージアムにある、おもてにオランダ東インド会社の獅子マークが打ってある貴重な小判で、裏面にたくさんの小さなマークが入っています。これは、両替商が金の品質を確認するために入れるものだと言われていて、「小極印」と我々は呼んでいます。これだけたくさん打ってあるということは、この小判は日本国内でかなり流通したものを輸出したものであることがわかります。担当学芸員には、「これは非常に大事なもので絶対にはすり替えなどが起こらないようにしてください」と言い残しておきました。

スフォルツァ城ミュージアムではコインがこういう状態で保管されていて、大判も1枚ありました。実は少し前にロシアのエルミタージュ美術館から、大判の側面に模様が打ってあるようだが、それが何なのかを教えてほしいとの問い合わせメールがありました。私は大判を手にとって見たことがなかったので、このスフォルツァ城ミュージアムで確認してみることにしました。そうしたら、やはり側面に模様がおり、葉のような絵柄に見えました。文献を調べたところ、大判は薄いので何枚か重ねて側面にマークを入れるそうです。1枚ではわかりにくいのですが、ここを見ると三つ葉のように見えます。これはこれからの研究課題ですが、大判のそれぞれにどういうマークが入っているかの確認作業を続けることで、明確な模様が明らかにできるかもしれないと思っています。ただ、大判はなかなか手に取って調査できるものではないので、躊躇しているところです。ミラノのこの博物館は、日本の貨幣についてのカタログがイタリア語で出版されており、それに従って現物チェックをしたら、すべてが収蔵されていることを確認できました。

また、ジェノバにも調査に行きました。私はお雇い外国人のキヨッソーネが近代日本の紙幣をつくった職人であることは知っていましたが、コインも持っているのではないかと問い合わせたところ、持っているとのことでした。ただ、収蔵庫の移転作業中だったので、収蔵品が箱詰めされており、全部は見られないかもしれないということでした。去年行って実見したのは595枚だったので、今年改めて行く約束をしています。キヨッソーネは紙幣寮に勤めていた職人ですから、紙幣を集めていたのではないかと思い探してもらったところ83枚があり、その中には山田羽書が1枚ありました。これからこれらも研究対象にしていこうと思っています。研究を始めるにあたって、青山霊園に行ってキヨッソーネが眠る墓にお参りして、研究がうまくいくようにお願いしてきました。

これは木浦の博物館で、このような展示がしてありますが、折二銭などの大銭と呼ばれる大きなお金がけっこうあります。少しだけ調べましたが、その後に教科書問題で日韓関係がこじれたために、データを公開することはできていません。調査させてもらった分についてはデータを持っていますが、数時間の調査でしたから、それはほんの一部です。これは博物館での作業風景です。ただ、博物館で展示されている資料の調査は夜にやるしかないので。

菊池 ありがとうございます。日本貨幣の考古学がご専門でありながら、海外でも非常に精力的に研究を積み重ねられてこれ大変に刺激を受けました。私もドイツ史が専門ですのでド

イツへ調査に出ますが、櫻木先生の方が積極的に海外展開なされているように思えてきます。では質疑の時間に移ります。

岡部 途中で武蔵墨書小判の贋作の話が出てきましたが、このようなフェイクはコレクター用のものですか。

櫻木 そこはわかりません。コレクターがいるからフェイクがつくられるのだろうとは思いますが。

岡部 明治に入ってからつくられたものですか。

櫻木 それもわかりません。フェイクをつくるとしたらコレクションが始まった後のことだと思いますから、それほど古いものではないと思います。ただ、打たれたマークが2種類あっても良いのではないかと言う人もいます。だから、今はフェイクとしていますが、本物である可能性もあると思います。残っている資料が少なすぎて、そこはわかりません。何度も言いますが、墨の状態や文字を見たら、良品に見えて偽物という感じはしませんでした。

西崎 私はブラムセンの海底ケーブルのほうに興味があって、日記などは残していないと聞いていますが、日記はありますか。

櫻木 段ボール箱に彼の残した書類などが入っており、それを精査しないと断言はできませんが、日記は見えていないです。

西崎 それは私自身の研究というより、学生が興味を持っていたのでお聞きしました。

櫻木 そういうことでは、長島先生のほうが過去に詳しく調べられているのではないかと思います。私は、先生が調べなかった古銭について日の目を見せてあげたかったということです。

島西 モチベーションについて2点うかがいたいのですが、1つには金貨や銀貨を日本人が流出させるモチベーションは何でしょうか。銭貨であれば、近代には使わないだろうと考えてコレクターに売ることはあると思いますが、貴金属である金貨や銀貨をなぜブラムセンのような人たちに売り渡すのでしょうか。もう1つは、コレクターは純粋に集めて楽しむことがモチベーションになっているのか、それとも投資対象と考えているのか、そのあたりはどのようなのでしょうか。

櫻木 基本的には自分の収集欲を満たすために集めると考えています。しかし、あわよくば転売などをして儲けられれば良いと。ただ、ブラムセンの行動を見ると、自分が出した額よりも少ない額で良いから大英博物館に買ってほしいと書き残しているのです、儲け仕事としてやっているイメージではないような気がします。

最初の質問は、例えばなぜブラムセンに売ると言われましたが、ブラムセンはデンマーク人であって特殊だというイメージはおそらく持っていないと思います。

島西 基本的に、コレクター間で取引されているということでしょうか。

櫻木 コレクターの世界というのはまさにそうだと思います。僕らにとっては1円の価値がなくても、コレクターにとってはすごい価値がある場合があります。まして金・銀貨は素材価値

があるのでどうしても高価になりますから、お金があれば集めたいと思うのではないのでしょうか。

菅沼 膨大な貨幣で圧倒されました。ものすごい数が博物館やいろいろなところに分散されて収蔵されているということで、データをどういうふうに整理されているかに関心があります。私は各国の公文書館などで集めた公文書のデータを整理するのに苦労しているのですが、それより貨幣のほうがもっと大変だろうと思います。どういうふうに整理されているのですか。

櫻木 まずデンマークの1,278枚について、私の考え方の原則は、その博物館の所蔵資料なので、自分の責任で写真を撮影して保管すべきだと思っています。ただ、今回はカタログをつくる、ましてコロナ禍の中でしたから、ウィートランスファーというファイル転送システムを使って全点の写真を送ってもらいました。私と出版社はそのデータを持っていますが、基本的にはどこにも出していません。責任を持って写真を撮ってもらい、それをきちんと整理して持っているしか手がないと考えています。

大英博物館の場合は、私は生の写真を持っていません。大英博物館の中で所蔵品のデータをきちんと整理し、どの写真がどれに対応するということがわかるようになっているのだと思います。

菅沼 例えば年代別や種類別など、分散して保管されているものの関連付けはどうでしょうか。

櫻木 それはカタログをつくる時に一番大事な問題で、まず、どういうジャンルを設けるか、あるいはどういう順番で掲載するかということなどです。歴史をやっている人間としては発行年が古いものから並べるべきであると考えるので、そうすると日本の場合は銭貨から入るわけです。でも、小判が大事と思えば小判、金貨が大事と思えば金貨から入る人もいます。私の場合は、歴史的に古いものから並べようということで、まずは銭貨、次に金貨・銀貨、そして現代貨幣といった区分で意味付けを持たせて掲載しています。

その分類、仕分けをするのが私の仕事になります。送られてきた写真から私がそれを組み立てなければいけないということです。答えになっていますか。

菅沼 まだはっきりとはつかめていませんが、およそのところはわかりました。

岡部 今の質問に関連しますが、貨幣のカタログに関して標準化されたコーディングの仕方とか、データベースに必ず入れなければいけない項目などはあるのでしょうか。

櫻木 そういうものはないのです。だから私のデンマークカタログがさががけ的になっていると考えています。私としては大英博物館のコインについて過去にカタログをつくったので、次のパリの資料についてもこれを踏襲しながら、問題点があれば改善していこうという気持ちです。まったく同じ種類の貨幣ばかりではないので、新たなジャンルが出てきたらそれをどうするか考えなければいけない。

菊池 似たような質問ですが、そのような分類をする際の原則といえますか、フォーマットが確立していない状態なので、櫻木先生の経験なりこれまでの研究の蓄積に基づいてそれぞれの

貨幣を位置付けて整理していくということですか。

櫻木 そうです。高木さんなどの研究仲間がいるので、一人で決めるのではなく議論してみんなで作っていかうということで話し合っています。これからもそういう形でやっていくつもりですが、ほぼルールはできてきたように思います。

菊池 ルールをつくりながらやっているという。

櫻木 そうですね。我々の仕事がパイオニアになっているので、なるべく後で文句を言われないようにやっているということです。

岡部 そのルールのマニュアル化はまだされていないということですか。

櫻木 そうです。

岡部 将来的には何かそのようなものが確立されていくことはあるのでしょうか。

櫻木 今言いましたように、歴史的に古い順でいくとか。素材ではないということです。例えば、丸くて四角い穴の開いたものを銭貨と呼んでいます。実際には素材が金のお金もあるわけ。あるいは銀の永楽通宝もあります。では、それらをどこに入れるのか。金貨・銀貨に入れるのかという話になった時に、通貨としての銭貨であれば素材に関係なく形状で分類しようと考えています。しかし、幕末近くになると天保通宝のようなものも出てくるし、銭貨の形にバリエーションが出てきます。これらは銭貨に含めていますが、そういうことをいろいろと書き出していけば、ルールはできあがると思います。

菊池 そのようなマニュアルは、師匠から弟子に口頭で伝わっていくという形ではなく、テキストとして、つまり教科書のような形で残すことはあり得ますか。

櫻木 それは、いわゆる凡例のような形で表現しています。これまでも書けるところは書いています。

千枝 私自身のことではないのですが、知り合いが櫻木先生の下でデータベースをつくっていますが、発掘している担当者にどういう認識があるかという点で時折作業を進める上で悩んでいるようです。具体的には、不明銭が非常に多い出土銭もあって、櫻木先生が見ればたぶん減っていくと思いますが、発掘調査報告書上でのデータの取り方についても「古銭」としか書いていないものがあったり、全部の種類が出ているわけではないので困る場合があるそうです。櫻木先生も一応マニュアルを出されていますが、それに出てこないものもあったり、コレクターが集めたものになると小判などが入ってきたりして、出土銭はあまり出てこない場合もあると思うのです。そうすると、考古学の人間は古いものから一括してデータをつくっている場合が多いのですが、たぶん研究者の中でも粗密があって、遺跡の発掘を担当した研究者が模範銭まで調べて報告書にその情報を載せている場合もあるけれど、その一方ではそこまでしていなかったりということがあって、それらの情報を統合するのがなかなか難しいようなのです。

また、出土品ではなくコレクションにしかない金属貨幣とかも存在しています。例えば、元和通宝は発掘では出ていませんから、そういうものを整理するというのは、分類が難しく大変

だろうと思います。研究者の中には考古学プロパーの人もいるし、半ばコレクターとしてやっている人もいて、まったく専門外の人が入りづらいのが日本貨幣の分類の世界ではないかなとも思いますし、事実、今でもまったく見たことがないものが出てくる。先ほどの慶応通宝などは発掘では出ていないですね。

櫻木 出土していません。

岡部 そうするとカテゴリーが増えてくるので、なかなか難しいのかなと。現状を見ると、なかなか先生のお話の通りにもいかないのかなという印象があります。

櫻木 例えば、寛永通宝の1文銭が出ていて、4文銭も出るわけです。でも、その間で10文銭という大型の宝永通宝が出ているのです。発行順ということであれば、本来ならこの間に入れ込まないといけないのですが、注釈を入れ、寛永通宝だけで見ていったほうがわかりやすいので、これは例外であり、時期順に並べていないということを書いています。いろいろ書き残しておかないと、なぜそういう形でグループ分けしたのかとか、どういう順序で掲載したかということがわからなくなってしまうので、書いてはいます。

菊池 今の話をうかがうと、国外に収蔵されている貨幣の資料的価値はかなり高いようです。そうすると、海外博物館が所蔵しているものを櫻木先生が整理してあげる、というだけでなく、慶応通宝のように、櫻木先生にとっても新しい発見がある、ということですね。

櫻木 日本史の中での発見もあるわけです。

菊池 しかもそれは、古銭学における資料的価値だけでなく、経済史にとっての価値もあることがよくわかりました。一方で、そういったものを利用するために、櫻木先生や千枝先生のように海外へ行って国外の博物館を調査するという専門家は、それほどたくさんはいないような気がします。実際、どうなのでしょう。櫻木先生が「どんどん海外に行って調査するように」と促しているのでしょうか。

櫻木 それは、高木さんと川戸さんの写っている写真をお見せしましたが、図師宣忠さんのような西洋史の人にも、チャンスがあれば一緒にやろうよという呼びかけをしています。それほど多くの人が実際に経験しているわけではないことも事実ですが、調査でなくても学会発表をしようではないかと誘っています。それは千枝さんが去年ブルガリアのソフィアに行ったり、我々がワルシャワ大に行ったり、私は去年ベルギーのアントワープ大学で報告をしました。私の表彰理由の3番目に、若手を指導しながら学会に参加したりして指導的行動を取ったということがありました。そういうふうやってきたのは事実ですし、力は及びませんが、次の世代の人が裾野をどんどん広げていってくれば良いのかなと思っています。

菊池 実は私も、櫻木先生に弟子入りして調査に連れて行ってもらいたいとお願いしてはいるが、ちょうどコロナ禍があったということもありますが、その後もなかなか実現せず今日に至ります。ベルリンのコレクションの調査というお話もありましたが、今後そうしたことにぜひ参加したいと思っています。

それでは、本日はありがとうございました。今回でシリーズは最後となります。3回ともそれぞれ大変勉強になりましたし、多くの刺激を受けました。最後ですので、特に残しておきたいメッセージがあればお願いします。

櫻木 自分だけの研究で終わってしまわないように、私はこれからも啓蒙活動というか、若い人たちに刺激を与えたい。そのために、立教大学の菊池先生にこういう場を設けていただけたので、自分なりに精一杯、熱く語ったつもりです。私も健康である間はこのような活動を続けていきたいと思っています。

ロンドンで受賞講演をした時に出た質問の中に、次は何をやるようとしているのかというものがありました。そこで、例えば私はベトナム北部の調査をしましたが、南部や中部はおそらく状況が違うので、ベトナム南部の調査をしてみたいと答えました。もしそういう機会があれば、ベトナム考古学を専門とする先生には私も一緒に連れて行ってほしいというお願いをしています。これまでに日本中はかなり調査のために歩いたので、現在は最後の段階だと考えています。ヨーロッパ調査については、コロナ禍以後はお金がいぶんかかるようになってしまって、1カ月間で100万円くらいはすぐにかかってしまいます。だから研究費を取らなければいけない。今回は日本学士院が補助金をつけてくれましたが、お金がかかるのは事実なので、知恵を集めながら皆で協力して大きなプロジェクトをつくって、大きな予算をもらい良い仕事をしていきたいと思います。皆さんもご協力をよろしくお願いします。

菊池 ありがとうございました。それではこれで、第3回目の櫻木先生のご講演を終わりにしたいと思います。櫻木先生、ありがとうございました。

[終了]

参考資料

大英博物館カタログは『Shin'ichi Sakuraki ,Helen Wan and Peter Kornick with Nobuhisa Furuta, Timon Screech and Joe Cribb『Catalogue of the Japanese Coin Collection (pre-Meiji) at the British Museum 大英博物館所蔵日本貨幣カタログ』(British Museum, 2010年)』

デンマークカタログは『Shin'ichi Sakuraki and Peter Kornicki, Coin authentication and appraisal by Nobuhisa Furuta『Japanese Ancient Coinage I A Catalogue of William Bramsen's Collection in the National Museum of Denmark, Copenhagen』(The Japan Academy, 2023年)』

その他の写真は櫻木が撮影ないし所有のもの（但し、写真11のみは千枝が撮影した写真）